

解釈にすぎず、表現としての「死」や「殺す」は復活や婚姻と同一でない。表現は表現として素直に受けとってよいのではないかとする。尾崎氏は大局においては賛成だが、表現の背後にある「古い形の残存」、その信仰的意味をも考えるべきだと主張するのである。司会者から、雄略の説話における「死」とは異質な、六世紀末の捕鳥部万の個性的な「死」を描いた説話——難波吉士の記録したものと考える——を出し、報告を支持して、この話題を終わる。

歴史的事件に関する歌と個性的作者との関連について。まず報告者の補説がある。欽明紀23年の「大葉子」の歌、聖徳太子の飢人に与える歌、舒明天皇の国見の歌（万葉二）、中皇命の歌（三）、額田王の歌、中大兄三山歌（一三）、斉明紀の建王をいたむ歌、孝徳紀の野中川原満の歌など、七世紀の半ばごろから末に近づくにつれて、民謡的でない個性的な歌、作者のはっきりしている歌があらわれてくる。このあたりから歌の作者をむやみに疑ってかかっているわけではないかと。

これに関して、賀古氏からは、「大葉子」の歌はその周辺の歌、聖徳太子の歌は太子に対する讃歌、尾崎氏からは、国見歌などは代作歌、といった注解がはいり、また、中大兄三山歌、額田王の「紫野行き」（二〇）の歌などの作者や歌の場やをめぐっての尾崎氏・賀古氏・報告者らのやりとりは、天智論・鎌足論に進み、その間、田辺説・五味説・保田説・折口説・吉永説などが類上にのぼって話はずむ。この話は簡単には結論が出そうもない。

人麻呂の叙景・寓意について。報告者から、人麻呂の「東の野に」（四八）の歌は純粹叙景歌と言われているが、寓意の歌ではないかという問題提起がなされる。素直に尾崎氏が報告者に握手を求め

る。この歌の上句に軽皇子の登場の、下句に日並皇子の薨去の寓意を見る、同意見なのである。

賀古氏は、実地に見ても純粹叙景でないことは確かだが、叙景的表現をとっての人麻呂の心情表現（空白感・哀愁感の大きな表現）であるとする。長反歌全体として、日並皇子への追憶と軽皇子への期待との二重発想なのだから、ことさら寓意を強調する必要はないとするのである。

尾崎氏はさらに、「茜さす日は照らせれど」（一六九）に持統と日並との寓意を見る吉永説を引いて、「東の野に」の歌にも表面は叙景的な詠嘆法だが裏に寓意がこめられているとする。司会者も人麻呂歌集非略体歌の皇子への献歌にも寓意を有する歌があるとして賛成する。

叙景性と寓意性とを認める点では、報告者をはじめとする全発言者の見解は接近する。かくて、人麻呂の作歌態度の理解にはなお興味深い対立を見せたままながら、大久間報告のしめくりが人麻呂であったのに応じて、討論も人麻呂でしめくりられた。

（文責 渡瀬 昌忠）

八・九世紀および総まとめ

（司会 加藤 静雄）

問題の提起

加藤 大和の国家形態が、いつごろ、どのように成立し、大陸文化をどのように吸収したか。そして、それと古代文学との関係を中心に把握するかという賀古氏の五世紀までについての発表、散文学と律文学という観点から、個性的な文学の現われてくる過程を示した大久間氏の六・七世紀の文学についての発表があり、八・九世紀の文学を含めて、古代文学史の問題点をいくつか提起し、それを話の糸口として古代文学史の問題点のまとめに入ることとする。

1 古代文学史というテーマの中に九世紀をいかに位置づけるか。

2 万葉集の最終の歌（七五九年）から、古今集成成立までの文学はどうあったのか。

3 八・九世紀になると、漢詩文が盛行するわけだが、その理由は何か。

時代区分について

賀古 六・七世紀に一つのポイントをおいて、古代文学を考える場合、当然八世紀は考察の対象としなければならない。九世紀の新撰万葉集の成立が一つの区切り目になると考えるし、古代というものを奈良朝以前と考えるのではなく、中古といわれるもの全部を含んで古代と考えていいのではないか。

醍醐天皇の代は、文学のみならず、その他の面においても一つの大きな区切れを持っているということ、つまり古今集成成立以前に一つの区切れを考えていいのではないか。古今集の成立は、中古的な世界の中に入っていくということと考えられる。

万葉から古今へ

大久間 万葉集の歌に二つの層を考えて、奈良時代の初めをもって前期と後期とに分ける。

前期万葉というのは古い思想で作られたものであり、奈良時代以後に新しい思想に発展した万葉の中で文学意識が生れてきた。この文学意識は、古今集時代の文学意識とは質は違うけれど、その高さにおいて変わらないと思われる。例えば家持の文学意識は古今集時代の文学意識と同じ高さにあるものといえよう。しかるに作品そのものが、現代人に万葉は受け入れられるが古今は必ずしもそうでないのは、文学のねらいが違っていたといえよう。

古代の下限について

大久間 古代の下限を院政期直前と考える。奈良朝以前を古代前期、奈良朝以後院政期直前までを古代後期とする。

院政期は、武士階級が勃興して、貴族階級の文化を侵蝕していき、言葉の上からも、文学の質からいっても、世界観に於いても庶民的なものが入りこんできて、その以前の時代と大分質が違ふ。そこで院政期から中世と考えていきたい。

賀古 院政期は、平安末期まで入れて考える古代の最後であり、中世の出発点ということで両方に交叉しているので、わかりやすく平安末期を古代の区切れと考えてよい。

大久間 院政期から平安末期の約百年間は古代と中世の中間にある時代として、どちらに入れたらよいかわからないというのではない。千五百番歌合せ、新古今集、あるいは増鏡など鎌倉時代まで下

っても、これらには王朝的なものへの憧れが強いので中世的なものと平安朝的なものが交叉しているのでどちらへ入れていいかわからないといわねばならぬ。言語に大きな改変があり、社会情勢の変化、新しい仏教の興隆などを考えて、大きな世界観の更新が行われているという点で、院政期に一つの切り目があるといつてよい。

賀古 思想交替とか革命とかいつて時代区分をしてみても、それは妥協ではないが障子を一枚切ったり、隣の部屋へ行くようにはつきりといかない。

時代の風潮とか、社会思想の変遷などで変わってきたながらも、文学のリーダーは貴族、あるいは貴族文学への憧れに一つのポイントをおいた没落貴族や、武士からの脱皮した人たちであり、江戸時代まで考えてみても、文学を背負うものは、貴族であり、貴族の流れをくむものであり、庶民ではない。ここに日本文学の後進性があるのであるが、文学史の流れとしてはこの点で区分をすることは難かしい。こんな意味から、漢風意識が強くなっていく醍醐の時代が一つの区切れになる。

大久間 文学の担い手としての没落貴族は、すでに貴族とは言えないのではないか。例えば文学を生活の糧とした兼好が、貴族であったら徒然草は書けなかったし、歌の指導もできなかったであろう。庶民に転落した精神によって書けたのではないか。

町方 兼好の精神は貴族であった。江戸の浪人が寺小屋をやりながら武士の気風を持っていたように兼好は形の上では貴族でなくとも、貴族の思想の流れの上に立っていた。

古代と中世の区分の一つに、儒仏思想によることが考えられぬか。文学の上にも、政治形態にも儒仏思想の影響が考えられる。

古代の前期・後期の問題

大久間 古代とは何かという問題は大きいが、形式的に古代とは何かといつても、人によってずいぶん違いがある。古代の前期と後期にも共通点もあるが、万葉を中心とした前期の文学と、源氏を中心とした後期とは大きな違いがある。それを古代という名で統一しようとする拠りどころの一つに、天皇中心の貴族社会の文学だという見方がある。しかし、万葉の庶民の歌、作者未詳歌は古代的でないとはいえないのであって、古代を前期・後期に分ける本当の意味は難かしい。そこで古代前期は、古代性の強い時代、ことに奈良時代の前までは原始未開の性格、世界観が支配していた時代で、奈良時代になって原始的なものは薄れてきたが、古代的な物の考え方を残していたと考えると、院政期直前までの古代後期ほどの程度古代性をもっていたか、奈良時代と世界観の性質も違っている。古代後期を「古代」と名づける理由はどこにあるか。

尾崎 古代前期は天皇親権の時代、後期は藤原氏が政権を握った時代で、文学も藤原氏の時代になると鎖国的になり、結局貴族だけが文学の表面に出てくる。表現、題材もすべて貴族的なものになり、強靱な庶民的なものが存在しなくなっていったのが後期ではないか。そこでは漢文的なもの、庶民的なものが排除されて、日本文学の骨格は弱くなったが、日本的なものは素直に育った。折口先生は「巫女から女房へ」ととらえ、女官の性質が変わってくる所に、古代の前期と後期の相違を見る。それを政治の流れ、時代の流れに即して受け取ろうと思う。

女房文学が、固有のものを伸展させ、磨いていった点で源氏や古

今を認めねばならぬが、視野は狭くなり、体質は弱くなった。しかし、それで古今が万葉より退化しているとはいえないのであって、文学史的に必然の過程として、源氏物語は生れたのだ。

漢詩文の問題

賀古 女房文学が必然として生れたのは政治形態のためだけなのだろうか。他に何か理由があるのだろうか。

漢詩文が衰えたかどうかは疑問である。いい作品は残っていないくとも、衰えたかどうかは別の問題である。漢詩文は日本文学としては重大な問題であるのに、普通の平安文学史で、漢詩文を説くのにスペースを与えないのは不可解である。

大久間 古代文学を専攻するために、万葉とか古事記に心を奪われすぎているのではないか。今日から考える文学史上の比重は小さいようであるが、懐風藻などの漢詩文の系列は、当時の貴族階級、知識階級においては万葉集より大きな関心を占めていたのではないか。その流れが平安の文華秀麗集となり経国集となった。中国から入った文学思想が完全に消化されたのが平安初期であった。

しかし、中国との交渉がとだえ、新しい文学を求める時、在来の文学に求める以外に道がなかった。漢風謳歌時代に僅かに抵抗し、あるいは和歌に心を寄せる人々の書きだめ、吹きだまりのようなものとして成立した万葉集以後、かすかに底流として流れていた和歌の伝統が、六歌仙時代を経て、古今集に新しい息吹を与えられて結集した。古今集を編纂した時の文学意識、抱負はまことに大きなものであった。

文学史をいかに見るか

加藤 万葉時代の時代主潮が漢文学であったといわれるにもかかわらず、現代のわれわれが万葉により心を奪われるのは何故か。

賀古 奈良朝は漢詩文の資料が少ないので、平安朝の資料から考えねばならぬが、公的な文章が漢文であり、儀式の饗宴の場でまず漢詩の朗詠が行われた事など考えると、漢詩文の世界は大きかったといえる。奈良朝以後、当時の文人は和歌を第二文学として意識していた。

大久間 文学史は現代人が、現代を超越して古代人になり変ることができないのだから、現代の立場で見なければならぬ。

尾崎 現代人の目に映った文学として批判しただけでは不十分だ。古今集を編纂した気持や、俊成が新古今を編んだ心境を、できる限り復原してみても、再び現代にもどって考えてみる必要がある。研究者の主体性は持ちながらも、文学が生れてくる過程を見ねばならぬ。作者の感情がわからなければ批判は見当違いになるのではないか。

大久間 文学史と文学享受史と混同すると文学史が明確にならないのではないか。作者の感情がわからないと文学がわからないというのは、文学に責任があるのであって、読者は作者にまで責任を負う必要はない。

近藤 文学史とは、何を解明するものだろうか。当時の時代思潮が漢詩文を第一文学とし、和歌を第二文学としても、そのどちらがよりよい文学作品を生んでいたか。その当時の思想と文学の質とは比例していない。文学史は文学の質の高さを云々していくもの

だと思ふ。

尾崎 現代のわれわれが当時の文学を誤解したままで文学史を考へることは危険である。歴史的価値も考へて文学史を見る必要がある。

賀古 文学価値史が文学史にとって大切であり、そこに入るために文学享受史も必要だ。現代の立場、現代まで積み上げられてきた文学価値観によって古代文学を見るのであり、その観点に立てば、享受史では第二文学であった万葉集が第一文学的な性格をもっていたということを考えるのが文学史にとって大切な問題だ。今までの文学史はほとんど享受史で、出来る限りその時代の人に接近した方が理解されやすいということだけを考へていたという反省がなされねばならぬ。

尾崎 長年の批評は無視し得ない真実があるのであり、それを大切にすべきだ。

大久間 享受史的にいうと、狭野茅上娘子の歌など明治の初期から人気のある歌であるが、折口先生、土屋文明氏あたりから評価が低くなる。伝統的享受史だけで価値判断をするのは間違いで、過去に高い評価が与えられたからいい文学だということはいえないのである。

女房文学の位置

賀古 女房文学が、享受文学史では第一文学的に取り扱われているが、平安末期にはそれが消えて行くのはどうしてなのか。女房文学の文学価値はどのように継承されて行くのか。あるいは断絶するとしたら何故か。

近藤 女房文学が、文学史において大きく語られるのは不満である。和歌には文学意識があるが、女房文学には文学意識がなかったのではないだろうか。文学の価値判断とはどういう風に考へるものだろうか。

大久間 平安時代の文学の最高の理想は和歌であり、女房文学は第二文学であった。平安宮廷の一つの慰みものとしての女房文学は根が浅いが故に平安末期に断絶があると見られる。平安末期に源氏や伊勢が取り上げられるのは、物語の内容より、和歌製作の場をいかにつかむか、ということであつたらう。

渡瀬 狭野茅上娘子の歌は古代詞章をうけついでもので、文学的空想が生みだしたものではない。しかし実体としてはそうであつても、形象としては人々の心を動かしたのは、あの歌が出雲の国引きの話と同じで、出雲の語部の詞章の伝承の担い手と同じものが狭野茅上娘子に流れていると考へたい。

(文責 加藤 静雄)